



おじいさんと
不思議なマツチ箱



Etsuko

不思議なマッチ箱

ある国のある町に、ひとりでくらしているおじいさんのお話です。

おじいさんは古いマッチ箱をあつめるのが好きでした。

きれいなラベルがついている昔のマッチ箱をたくさん持っています。

今はマッチを使う人が少ないので、おじいさんはそれらのマッチを古風な雑貨をおいているお店や、古道具屋さんや、昔ながらのたばこ屋さんで買ったのでした。

おじいさんはパイプたばこを吸うときに、宝箱に入れたたくさんのマッチ箱をながめて、どれかひとつえらんでマッチを擦ります。

そのとき、不思議なことがおきるのです。

マッチの火がてらす明かりの中に、マッチラベルの絵の中の人や動物や物があらわれて、おじいさんとお話ししてくれるのでした。

それはそれは不思議なことでしたが、おじいさんはそのことをだれにも話しませんでした。

自分ひとりの楽しみにしたかったからです。

ある日、おじいさんは庭仕事をおえて、晩ごはんもすますと、いつものようにマッチをえらびました。中国娘がきれいな花をつんでいる絵のマッチです。

パイプを用意してマッチを擦ると、明かりの中に中国娘があらわれました。

「お嬢さん、そのお花をどうするんだい？」とパイプに火をつけながらおじいさんは聞きました。

「わたしは宮殿の召使いなの。このお花はお妃さまのお部屋にかざるのよ」

娘が花を入れたかごを見せながらこたえました。

「そうかい、とってもきれいなお花だね」

「シャクヤクって言うのよ。お妃さまがいちばん好きなお花なの」

「そうかい、そうかい。ところで、」

おじいさんがもうひとこと言いかけたとき、マッチの火は消え、中国娘も消えてしまいました。

おじいさんはもうひとこと「きみは小さいのにお仕事をしててえらいね」とほめてあげたかったのです。

そのつぎの日、おじいさんはねる前に一服したくなり、パイプを用意するといつものようにマッチを擦りました。今度はロシアのクマが木の実を食べている絵のマッチです。

マッチに火がともりクマがあらわれると、おじいさんはいそいで話しかけました。

「やあ、きみは木の実が好きなの？」

クマが妙にいらいらしながらこたえました。

「好きもきらいもないわ。とにかくなんでも食べなくちゃ。もうすぐ冬がくるのよ。冬眠前にいっぱい食べなくちゃいけないの。おなかに赤ちゃんがいるから、赤ちゃんのぶんまで食べるのよ。あら、おじいさんも食べられそうだわ」

おじいさんはしまった、と思いました。はらぺこのクマがおじいさんを食べようと大きく立ち上がったからです。

あわてておじいさんがマッチの火をふき消すと、クマの姿は消えました。

「ああ、今日はあぶなかった。インドの人食いトラのマッチを擦ったとき以来だよ」

ほっとしたおじいさんはパイプに火をつけるのをわすれていたことに気づきました。

「やれやれ、ねる前にどきどきしては体に悪い。今度はおとなしそうなのに話しかけてみよう」

おじいさんはたくさんのマッチから慎重にえらび、花や、蝶々、娘の絵のマッチを机にならべました。

「この娘さんに話しかけてみようかな」

おじいさんがえらんで手にとったマッチは、日本の娘の絵がついていました。

日本娘はきれいな着物を着て、りっぱに髪をゆいあげ、扇をもってにっこりとしています。

それはとてもきれいな娘でした。

おじいさんはなんだかうれしくなり、そのマッチを擦りました。

おじいさんはおどろきました。明かりの中にあらわれた娘は、おじいさんを見るとにっこりして、自分から話しかけてきたのです。

「わたし、さゆりよ。旦那さん、りっぱなおひげねえ。とても素敵よ」

「そうかい、それはありがとう。きみはもうお仕事をしているの？」

「ええ。わたしは芸者よ」

「ああ、ゲイシャ・ガールなんだね。どんな仕事だろう。踊ったりするんだろうね」

「ええ、踊ったり、唄ったりするのよ」

さゆりは袖で口もとをかくしながら「うふふ」と笑いました。

おじいさんはその姿にみとれました。着物もりっぱな髪形もすばらしく、なによりしぐさがまるでバレリーナのように優雅で、笑った切れ長の目も、とても美しい娘だったからです。

見とれてるあいだにマッチは燃えつきて、さゆりは消えてしまいました。

パイプたばこに火をつけるのもわすれました。

おじいさんはどうしようか、おろおるとまよい、

「どうせパイプに火をつけなきゃいけないんだ」

と自分に言い聞かせて、もう一度そのマッチを擦りました。

さゆりがあらわれて「あら、旦那さん。またお会いできてうれしいわ」と言ってにっこりしました。
おせじとわかっていても、おじいさんはとてもうれしかったのです。それはさゆりの声がとてもきれいで明るかったからでした。

「お嬢さん、」

「なあに？ さゆりでいいのよ、旦那さん」

「じゃあ、さゆり。もったきみとお話がしたいんだが、マッチの火がすぐ消えてしまうんだ」

さゆりはまた「うふふ」と笑って言いました。

「いい方法があってよ。そのマッチの火をロウソクにうつすの。そうすればロウソクが燃えるあいだ、長くお話ができるわ」

また火が消え、さゆりも笑顔のまま消えてしまいました。

「そうかロウソクか。そういう手があったんだな。明日ロウソクを探してみよう」

けっきょく、またパイプたばこを吸いそこねましたが、おじいさんはわくわくしながらベッドに入ってねむりました。

芸者のさゆり

またつぎの日、おじいさんはそわそわして、いつもならていねいに時間をかけてやる庭仕事を、おざなりに手早くすませました。庭の花々に水だけやってしまうと、ロウソクを探しにかかりました。

「あった、あった。これだ」

家の中のあちをひっくりかえしこちをひっくりかえししてようやく見つけたのは、きれいな花模様が描かれた絵ロウソクです。それは昔、日本に旅をした友だちがおみやげでおじいさんにくれたものでした。その友だちも今はもういません。そのことをさびしく思い出しながら、おじいさんはロウソクの絵をながめました。

「大事にとってあったがせっかくだから使わせてもらおう。こんなにきれいなら、さゆりをもてなすのにもぴったりだ」

そうひとりごとを言って、ひっくりかえした部屋をきれいにかたづけると、おじいさんはきれいな服に着がえてひげの手入れもし、すっかりかっこうよくしてから、さゆりのマッチを擦りました。

あらわれたさゆりは、袖のうしろであくびをかみころして、なんでもないかのようににっこりしました。おじいさんはいそいでマッチの火が消えないうちに、火をロウソクにうつしました。火がともると絵ロウソクの花は夢のようなきれいさです。

「おはよう、旦那さん。また呼んでくださったのね。うれしいわ」

さゆりは本当にうれしそうに言いました。

「今ごろおはようなのかい？ 何だかねむそうだね。もうお昼はどうにすぎたよ」

おじいさんはさゆりがねているところをおこしてしまったのかと思って心配になりました。

「あら、大丈夫よ。夜がおそい仕事だからお昼までねてるけどもうおきる時間なのよ。ちょうどよかったわ。それより、なんてきれいなロウソクでしょう。わたしのために用意してくださったのね？ とってもうれしいわ」

「そうかい、よろこんでくれてうれしいよ」

おじいさんはさゆりがよろこんでくれて飛びあがらんばかりにうれしかったのですが、なんでもないかのようなふりをしました。

「それに今日の旦那さんはとっても素敵なかっこうだね。わたし、おしゃれな人大好きよ」

「そうかい、ありがとう」

おじいさんは心の中でてれていました。でもやっぱり、それは顔に出さずなんでもないかのように言いました。

「ロウソクのお礼にひとさし舞いましょうか。旦那さん、見ていてくださいましね」

「それはいい。ぜひ見たいよ」

さゆりはにっこりとして、着物にさしていた扇をとって広げるとそれをひらひらとさせながら唄い踊りました。明るい調子の唄を口ずさみながら、かるがると袖を舞わせ、手を舞わせ、扇を蝶々のように舞わせ

ます。さゆりの踊りはとても素敵でした。

さゆりが扇をとじて「おそまつさまでした」と頭をさげてあいさつをしたので、おじいさんは思わず拍手しました。

「なんてすばらしい！ さゆりは踊りがとても上手なんだね」

「あら、うれしいわ。でもモダンダンスは下手なのよ。お客さんにさそわれてダンスホールに行ったけど、ふりつけをまちがえて相手のかたの足をふんじやったわ」

「それは、わたしの国のダンスかな？」

「そうそう。西洋ダンス。あれ、むずかしいのねえ、今度おしえてくださいな」

おじいさんは顔が赤くなってしまいました。さゆりのきれいな手をとって踊るのを想像したら、とてもはずかしかったからです。

「いや、わたしはダンスが苦手なわ」とごまかしてこたえました。

「あら、でもわたしより、きっと上手いにちがいないわ。いじわる言わないでおしえてくださいな」

「いやいや、とてもとても、踊りの上手なさゆりにおしえるのははずかしいよ」

それはおじいさんの正直な気持ちでした。だって、さゆりの踊りは本当にすばらしかったのですから。

「あら、いやだ。もうお座敷の時間だわ。ごめんなさい、旦那さん。わたしもうお仕事に行かないといけな
いの」

さゆりがあわてて、そして残念そうに言いました。

「さゆりのお仕事はお座敷って言うのかい？ 気にしないでいってらっしゃい」

「ねえ、また呼んでくださるでしょう？ お昼すぎならひまですから、またマッチを擦ってくださいね。約
束よ」

「分かった、約束しよう。またマッチを擦るよ」

さゆりがお別れのおじぎをして「じゃあまたね」と言ったので、なごりおしかったのですがおじいさんは
口ウソクに息をふきかけて火を消しました。

火が消えるとふっとさゆりの姿は消え、部屋が暗くなりました。

「おっと、もうお日さまがしずんだんだ。晩ごはんのしたくをわすれていたぞ」

おじいさんの言うとおり、もう日が暮れて晩ごはんの時間になっていました。今からお料理をする気にな
れませんが、おじいさんは朝ごはんの残りのパンにハムをはさんで食べました。

舞妓の話

つぎの日、おじいさんはさゆりのマッチを擦りませんでした。

またつぎの日もさゆりのとは別のマッチを擦りました。そうしていつものように花や虫にひとことふたこと話しかけて、パイプたばこを吸いました。

本当はさゆりにとても会いたかったのですが、さゆりがお昼におきてから夜お座敷に出るまでのほんのわずかな時間を、自分のために使わせてはわるいと思いがまんしたのです。

(なに、わたしにだってやることがいっぱいあるんだから、時間つぶしにはこまらんさ)

と、おじいさんは思いました。確かにおじいさんには自分の食べる食事のお料理をしたり、広い庭の木や花々の手入れをする仕事がたくさんありました。でも、どうしても、なにもやる気がしません。お料理も作る気がしませんでしたし、だいいちなにも食べたくありませんでした。

どうしてでしょうか、おじいさんはなにも手がかず、食事ものどをとらず、たださゆりのことばかり考えているのでした。思い出すのは、さゆりの笑顔や、言葉や、とても素敵だった踊りのことばかりです。(これはこまった。いっそまた会ってしまえば気がすむにちがいない。だがもう一日くらいがまんしよう。なに、やることはいっぱいあるさ)

そうおじいさんは思うのですが、けっきょくなにもできないのでした。

ただひとつできたことは、パイプたばこを吸うことです。

おじいさんはさゆりのマッチをふせて見ないようにしながら、宝箱の中からほかのマッチをさがしました。

ひとつ、日本の女の子のマッチを見つけました。年ごろは小さいのにきれいな着物を着て、髪をそれはきれいにゆいあげています。そしてなぜか両手を袖の中にかくしていました。

おじいさんはそのマッチを擦りました。マッチの明かりの中にあられた女の子は、何だかうかない顔でうつむいていました。

「こんにちは、きれいな着物のお嬢さん。なんで両手をかくしてるんだい？」

おじいさんが話しかけると、それでもあいそう笑いをして女の子もこたえました。

「こんにちは、旦那さん。わたしは舞妓なの。芸者の見習いなのよ。手をかくしているのは“見習いだから、お酒のおしゃくはしません”って言う意味なの」

「ほう、じゃあ、きみもお座敷に行くのかい？」

おじいさんは言いながら、あわててマッチの火を口ウソクにうつしました。“芸者”という言葉にひかれたのです。

「そうよ、旦那さん、おくわしいのね」

「いやいや、くわしくなんかないけれど、この間さゆりという芸者に会ってね」

「さゆりねえさんに？ ほんと？……まあ、」

さゆりの名を聞いて、女の子はびっくりし、そしてぼろぼろ泣き出してしまいました。

「どうしたの？ さゆりを知っているのかい？ なんで泣いているの？」

「さゆりねえさんを知らない人はいないわ。写真も売り物になっているし、長唄のレコードだって出ているのよ。マッチの絵にもなったわ」

おじいさんはふせているさゆりのマッチをそっと見ました。でもすぐ女の子に目を合わせてなぐさめようと思いました。

「そうかい、さゆりはそんなに人気者なんだね。じゃあ、きみはなんで泣いているの？」

「それは、わたしがこのあいだ、さゆりねえさんにはじをかかせてしまったからなの」

「さゆりに？ どういうことなのかな。よかったらくわしく聞かせてくれないかい？」

女の子はぐずぐず泣きながら、しばらくだまっていたましたが、おじいさんが「ないしょにするよ」と言うと、ようやく話しはじめました。

「あのね、ほんとは言っちゃいけないことなの。ないしょにしてね」

「もちろん、約束するよ」

「……このあいだ、さゆりねえさんといっしょのお座敷にわたしも呼ばれたの。さゆりねえさんがお客さんの前で踊って、他のねえさんが長唄を唄って、三味線をひいたの。わたしは鼓をうったの」

「鼓というのはその楽器かな？」

おじいさんは女の子が手に持ってみせた楽器らしきものを指さしました。どうやら小さい太鼓のようです。

「そうよ、肩にのせて手でうつもの。そしたら、わたし、これをうちまちがえちゃって……そしたら、」

「そしたら？ どうしたの？」

女の子はまたぼろぼろと涙をこぼし、言葉をつかえました。

「よしよし。泣かなくていいんだよ。なに、楽器の演奏をまちがえるなんてよくあることさ。きみはまだ小さいんだし」

「そうじゃないの。わたしが鼓をうちまちがえたら、酔ったお客さんが「さゆりが踊りをまちがえたぞ！」って大声をあげて、さゆりねえさんを笑いものにしたのよ。ちがうの、まちがえたのはわたしなのに。お客さんがあんまり笑うものだから、踊りも唄もはんばで止まってしまって……」

おじいさんはその光景が頭にうかんで、一瞬声が出ませんでした。

女の子も、あ～っと声をあげていっそう泣いてしまいました。

「それは、ひどい。ああ、泣かなくていいんだよ。きみのせいじゃない。それは酔ったお客さんのたちがわるいんだ」

「そうかもしれないわ。でも、さゆりねえさんは踊りをだいなしにされたのに、笑いながらそのお客さんにこう言ったの。

「まあ、大変なお目利きさんに見つかりましたわ！ わたし、上手くごまかしたつもりでしたのに」

って言ったの。それで、そのお客さんにおせじ言って、おしゃくまでしてごきげんをとったの」

「それは、くやしいね」

「ええ、くやしいわ。ねえさんはもっとくやしかったと思うわ」

「きっとそうだろう」

「でも、わたし、怒られなかったのよ。それでよけいもうしわけなくて」

「それはね。きっとさゆりも小さかったころ、演奏をまちがえたことがあったからだと思うよ。なんでもはじめから上手な人はいやしないからね」

「そうなのかしら」

「きっとそうだよ。だからね、きみも練習をしているうちにきっとまちがえないようになるさ。それに、そ

のことはお客さんのほうがわるいんだからね」

「ほんとは、お客さんのことをわるく言っちゃいけないの」

「そうかい、そうかい。じゃあ、本当にこの話はないしょにしよう。安心しなさい」

「なんだか、少し気がすんだわ。ありがとうございます、旦那さん」

女の子は涙をぬぐって頭をさげると、お座敷に出なきゃと言いました。そこで話はおしまいにして、おじいさんはロウソクの火をふき消しました。

明かりが消えると、部屋はうす暗くなっていました。

でもおじいさんはただじっとして、今の話を思いかえしていました。

おじいさんは、はらわたがにえくりかえるようなこちがしていたのです。自分のことではないのにくやしくてしかたがありませんでした。

(酔っぱらいめ！ さゆりを笑いものにしたらど？)

ゆるせなくてくやしくてしかたがありませんでした。でも、さゆりのように酔ったお客さんを相手にしている人にはこんなことはきっとよくあることにちがいありません。おじいさんはそう思い、やるせなく、いつもは飲まないお酒を飲みました。でも、ちっともおいしくないし気分がよくなりません。

(どうしたら、さゆりをなくさめられるだろう？)

そう考えても、なにもよい案は浮かばないのです。

けっきょくその日も、またつぎの日も、おじいさんはさゆりのマッチを擦りませんでした。

ただお酒を飲んで、ふさぎこんでしまったのです。

枯れてしまったばら

おじいさんが日づけもわからなくなったある日の朝、ドアをらんぼうにたたく音がしました。

おじいさんがふらふらしながら玄関まで行ってみると、大声が聞こえました。

「ウィル！ いるのか？ ウィル！ ウィリアム！」

その声は三軒先の家のマシューおじさんです。マシューさんはおじいさんより若い人ですが、ずっと昔からチェスで遊ぶ友だちでした。そして、ウィリアムとはおじいさんの名前です。

おじいさんはドアをあけました。

「やあ...どうしたんだい？...マシュー...」

おじいさんは自分で自分の声におどろきました。しわがれて病人のような声です。それにのどにたんのようなものがからんで、息ぐるしい気がしました。そういえば何日も声を出していません。

マシューさんもおじいさんを見てびっくりした顔をしています。

「そっちこそどうしたんだ、ウィル。病気か？ ひどいやつれ方だぞ」

そう言われて、おじいさんは玄関にかざってある鏡を見ました。そこにうつっていたのは、顔色が土気色になって頬がやせこけ、髪もひげもぼさぼさのおじいさんの顔でした。

おじいさんは自分でも、これはひどいと思いました。

「ウィル、知ってるのか？ じまんの庭が枯れてめっちゃめっちゃだぞ！ 奥さんのばらまで枯れているじゃないか」

そう言われておじいさんは血の気がひきました。あわてて外に出ます。ひさしぶりに見るお日さまの光がやけに目にちかちかし、手で光をよけながらやっと見わたしますと、たしかにマシューさんの言うとおりでした。庭木は黄色がかり、花もしおれています。

そして、なんてことでしょう。庭の入口まわりに植わっている大切なばらが枯れてしまっているではありませんか。

おじいさんは声もなくしてよろけながら歩いていきました。本当は走りよりたかったのですが、何日も食べずにお酒だけ飲んでいたので、足がもつれて走れなかったのです。

「スザンナ...！」

おじいさんはやっとならばらのところにたどりつき、枯れてしまったばらに呼びかけました。

「スザンナ...！わたしは、なんてことを...」

いまの季節はあおあおと葉がしげっているはずのばらは、葉がみんな枯れて黄色に変わり、枝もみどり色をうしなって枯れ木になっていました。

それはそれは、大切なばらです。

もうとうに亡くなったおじいさんの奥さんが、お嫁入りのときに実家から苗木で持ってきて育てていたばらです。おじいさんが奥さんと結婚してからずっといっしょに育てて背の高い木になり、さし木をしていくつもふやした木を大きく育てたのでした。それが全て枯れてしまったのです。

「スザンナ……」

おじいさんは細くなった声で奥さんの名をつけたばらに呼びかけました。ばらはカサカサの枯れ葉を風にゆらすだけでした。

(わたしはなんてことをしたんだ……神さま…)

おじいさんは声を出して泣きくずれてしまいました。地面をたたき土をにぎってくやみしました。

マシューさんは力つきて立てなくなってしまったおじいさんをささえ、家の中にもどりました。おじいさんはずっと涙をこぼしています。

マシューさんは部屋に入ると、あちこちどころがっているお酒のびんにおどろきました。みんなあきびんです。ウイスキー、ブランデー、スコッチなど、強いお酒ばかり、みんなおじいさんが飲んであけたのです。

マシューさんは言葉を飲みこみ、とにかく悲しみでうちひしがれているおじいさんをベッドにねかせました。それからお医者さまを電話で呼び、だまってちらかったお酒のびんをかたづけました。

おじいさんはこれいじょうないほど悲しんでいます。そのおじいさんにマシューさんはよけいなことを言いたくなかったのです。

まもなくお医者さまがきて、おじいさんのぐあいをみてくれました。

栄養ぶそくで弱りはて、それとお酒のせいで内臓を少しいためています、さいわいなことに病気にはかかっていませんでした。栄養をとってよく休めばじきによくなるとお医者さまは言いましたので、マシューさんは胸をなでおろしました。

お医者さまがかえってから、マシューさんはおじいさんのねているベッドのそばにイスを持ってきてすわりました。おじいさんはもう泣いてはいませんが、なにやらぶつぶつぶやいています。よおく聞いてみると、「神さま、おゆるしください」とくりかえしているのです。

「ウィル。なにがあったのか、聞いてもいいか？」

マシューさんはしずかに呼びかけました。おじいさんはつぶやくのをやめ、宙をうつろに見あげました。少し間をおいて、おじいさんは口をひらきました。

「……よく…わからないんだ…。……ただ、」

「…ただ？」

「さいきん、知りあった…娘さんのことばかり、考えている…」

マシューさんは顔を手でおおいました。そして大きくため息をつくと、
「それは、若くてきれいな娘さんなんだな？」
と聞きました。
「ああ...とても、きれいな子だよ...」
「そうか...」

マシューさんは顔の前で手をくんだまま、しばらくだまって、やっぱりしずかに言いました。
「自分でも気づいているんだろう？ ウィル、それは恋わずらいだ」
「そうだね。.....きっとそうだね。.....神さま。...神さま、この年で若い娘に気をとられた、このおろかな
老いぼれを、おゆるしてください.....」

マシューさんも胸の前で十字を切りました。おじいさんに聞こえないように、「この者をお救いください」とつぶやき、アーメンと言うと、マシューさんは立ち上がり、「食べるものを作って持ってくるからな」と言いおいて、自分の家にかえっていきました。

さゆりの言葉

マシューさんがかえったあとしばらくして、おじいさんはよろけながらおきあがりました。

さゆりに会わずにいられない気持ちになったのです。

おじいさんはパジャマにガウンだけはあって宝箱のある机の前まで行きました。そしてさゆりのマッチ箱をとり出します。

マッチ箱の絵のさゆりはあいかわらずきれいでりっぱでした。

本当なら、おじいさんは着かざってさゆりと会いたいのでしたが、悲しみで心のはりさけそうないま、着がえる気力はありませんでした。

マッチを一本とりだし、「神さま、」とつぶやきましたが、つづく言葉は言えません。「おゆるしてください」と言うのはとてもおこがましい気がしたのです。

マッチを擦ると、さゆりがあらわれました。

さゆりはまだねまき姿で、ねむたげにしています。そしておじいさんを一目見るなり、目を見ひらいて息を飲みました。

おじいさんはふらつきながら、ふるえる手でマッチの火をロウソクにうつしました。

「どうなさったの？ そんなにおやつれになって。ご病気でしたの？」

とても心配そうな声でたずねるさゆりになにかこたえようとして、でもおじいさんはのどがつまり涙があふれてしまいました。立っていられなくなりイスにすわりこんで泣き声をあげました。

一度泣き出してしまってもう止りません。おじいさんはさゆりのやさしい声に悲しみがふき出してしまったのです。

「旦那さん、どうなさったの？ 何があったの？ どうぞ聞かせてくださいな」

さゆりはイスのそばにより、おじいさんの前でひざをつきました。

おじいさんは泣くのを止めようとしても泣き声が止りません。それでもくるしげにうめくすきに「スザンナが、」と言いかけました。

「スザンナ？ どなたかのお名前？」

おじいさんは泣きながら、やっと言葉をつなぎました。

「枯れて、しまったんだ.....大切なばらが...」

「まあ...。スザンナというばらなのね？ 病気で枯れてしまったの？」

「いや...、水をやらずにいたんだ...」

「ねえ、旦那さん。泣いてるばあいじゃないわ。あきらめずにそのお花にお水あげて」

さゆりは強い口調で言いました。

「でも...枯れてしまったんだよ...」

「だいじょうぶ、きっとまだ生きているわ。ばらはさし木で根つく花でしょう？ そんなお花はとても強いよ。さあ、泣くのは止めて。すぐにお花にお水あげてくださいな」

さゆりにうながされ、おじいさんは外に出ました。じょうろに水をくみ、杖をつきながらばらのそばまで行って水をあげたのです。奥さんのばらは何本もありましたから、水場に何度ももどって水をくんで、水をかけてまわりました。

「スザンナ、生きてくれ」と声をかけながら、おじいさんはばらに水をかけました。

ぜんぶのばらに水をあげると、おじいさんはすっかり足がつかれて、杖をささえにしゃがみこんでしまいました。

でも、部屋でさゆりが待っていることを思い出し、力をふりしぼって家の中にかえりました。

部屋にもどると、さゆりはもうすっかり着がえてお化粧もし、りっぱなかつこうをしていました。

「旦那さん。毎日あきらめずにお水をあげてね」

と言って「きっとだいじょうぶよ」とつづけてかがやくようにほほえみました。

おじいさんはさゆりの言うことが本当のような気がしてきて、いくらか心強くなりました。

「とりみだしてすまなかったね。スザンナは...いや、そう呼んでいるばらは、亡くなったわたしの妻がのこしていったばらなんだ」

「まあ、ほんとに。それなら、大切なはずだわ。スザンナって、きっと奥さまのお名前ね」

「そうなんだよ」

「旦那さん、それから、ご自分のお体も大切にしてくださいね。そんなにおやつれでは心配だわ。ちゃんとごはんをめしあがってらっしゃる？」

「ありがとうございます。きっと食べるから」

「ほんとよ、約束して」

「約束するよ。毎日ごはんを食べるよ」

「ほんとによ？ それから、わたしと毎日会ってくださいな」

さゆりがそう言ったので、おじいさんは一瞬声がつまり、さゆりの顔をよく見て、

「毎日なんて、めいわくじゃないかい？ お仕事がいそがしいだろう？」

とこたえました。

「ちっともめいわくでなんかないわ。それより会えないで心配するほうがいやなの。おねがいだから、毎日お元気そうな姿を見せてくださいな」

「さゆりがそう言ってくれるなら、毎日会うよ」

「ほんとのほんとによ？ 約束して」

「約束するよ。毎日会おう」

さゆりはにっこりとほほえみました。

「それなら安心だわ。旦那さん、今日はもうおやすみになって。おつかれでしょう」

「ああ、そうするよ」

「また明日ね」

「ああ、明日」

そうあいさつをかわして、おじいさんはロウソクの火をふき消しました。さゆりがほほえんだまま消えてゆきます。

おじいさんはなんだか力がぬけて、ふらふらしながらベッドまで行って横たわりました。

(明日、またさゆりに会える)

そう思ったらとても安心できて、おじいさんはひさしぶりにぐっすりねむったのです。

ばらは生きていた

それから毎日、おじいさんはばらにお水をあげました。

マシューさんの看病もきいて、おじいさんは日に日に元気をとりもどしました。でも、杖がなくては歩けませんでしたし、ばらに水をやってまわるだけでへとへとにつかれました。

おとしよりのおじいさんは若いころのようにはすぐに体がもとにもどらないのです。それでも顔色はよくなり、やせこけてしまった顔もいくらかもとにもどりました。

さゆりとも毎日会っています。

さゆりはいつも笑いながらゆかいな話ばかりしておじいさんを楽しませました。

おじいさんは今までの人生の思い出をさゆりに話して聞かせました。いろんな話をしましたが、だんだん亡くなった奥さんをなつかしむ話がふえました。

おじいさんの奥さんの名前はスザンナ。

ラテン語のユリを意味する言葉がもとになった名前です。そのユリはキリスト教では、聖母マリアがきよらかな身であることをあらわす白いユリのことでした。

そのことも、おじいさんはさゆりにかたって聞かせました。

「わたしの妻の名前はユリを意味するんだよ。それもわたしたちの宗教上、とくべつな意味を持つユリなんだ」

「まあ、ほんとに？ あらあ、ぐうぜんだわ。わたしの名前もユリの名前なの。ササユリっていう日本の野山に昔からある、うすべに色のユリのことなのよ」

「本当かい？ それは本当にぐうぜんだ。二人ともユリの名前なんて」

と、こんなふうに、二人はいつも楽しくお話をしたのでした。

そんなある日、おじいさんはだいぶ動けるようになって、ばらの枯れ木を刈りこんでみることにしました。

ばらは短く刈りこんで大きく育てる花です。でも今は本当なら刈りこむ季節ではありません。もし枯れなければ枝は高くのびあがり葉はあおあおとして、もうすぐつぼみをつけるころのはずでした。

(時期はずれだが、枯れてしまったんだからしかたない)

おじいさんはそうあきらめて枯れ枝を少しずつ刈りこんでいきました。

枯れ枝はかわいた音を立ててわれるように切れ、おじいさんにまた悲しみを思い出させました。

少し涙ぐみながら、ひと枝ずついねいに刈りこんでいきます。それをわきにつむと、中まで枯れた枝が山になりました。

そうして、だいぶ根もと近くまでハサミを入れたときです。
生木に刃を入れるような感触がしました。

おじいさんは胸を高鳴らせ、思いきって切ってみると、枯れて見えた枝の中は若みどりの生木だったのです。

神さま、とおじいさんはとなえました。

そうです、ばらのスザンナは根もと近くは生きのびていたのです。

おじいさんはうれしくなって、ほかのばらもどんどん短く刈りこみました。そしてどのばらも根もと近くは生きていたのです。

「スザンナ。スザンナ...ありがとう、生きていてくれて。神さま、感謝します」

その日、おじいさんはさゆりといっしょによるこびあい、夜にはマシューさんと呼んでおいしいワインを飲みました。

だんだんとおじいさんの庭は息をふきかえし、さゆりとの楽しい日々もかさね、だんだんとマッチはのこり少なくなっていました。

春がすぎ、夏が近づいてきました。

少し汗ばむ季節になってきたころのことです。

おじいさんがいつものようにばらに水をあげていると、一つだけ、葉っぱとはちがうものを見つけました。それはよく見てみると花のつぼみです。今年は咲かないものと思っていたのに、スザンナは一つだけ奇跡のようにつぼみをつけてくれたのです。

おじいさんは飛びあがらんばかりにうれしくなり、お祝いしたくなりました。

きっとスザンナはまた季節が変われば、前のように美しいクリーム色の花をいっぱい咲かせてくれるにちがいありません。

おじいさんはすぐマシューさんと呼んできてそのつぼみを見せ、いっしょによろこびあいました。それから写真をとりました。さゆりに見せてあげようと思ったのです。

おじいさんはすっかり上きげんで、なにげなくさゆりのマッチ箱をとり出しました。すると不思議なことがおきていたのです。

ラベルの絵のさゆりはいつものようなりっぱなかつこうをしていませんでした。

ひと目で町着だとわかる地味な着物を着て、お化粧品もうす化粧品、髪もえりあしで地味にまとめています。そして少しうかない顔をしていました。

おじいさんは思いました。さゆりはおそらく芸者をやめてしまったのだと。マッチ箱をあけると、もうマッチはのこり一本だけでした。

(そうか。とうとうお別れか.....)

前からかくごしていたので、悲しくはありません。それでもおじいさんの胸は切なくなりました。おじいさんはしばらくイスにすわり、いままでのことを思い出しました。

ひととおり思い出をかみしめると、心をきめ、お金をあるだけ持って花屋さんに行きました。

花屋さんではまっ白で大輪のりっぱなばらを買えるだけ買い、それはひとかかえにもなる花束になりました。

家にかえたら、今度はたなの奥から大きな花びんを出しました。それはブルーオニオンと呼ばれる青い絵つけの陶器の花びんで、とても高価なおとっときのものです。やはりおじいさんの奥さんがお嫁入りのときに持ってきたものでした。

その花びんに買ってきたばらを生けました。

それはすばらしいながめでした。ばらも花びんもとてもきれいでりっぱです。

それをロウソクをおいているテーブルにかざりました。

ロウソクは五本ぞろいだったものが、とうとうあと一本きりになり、それもだいが短くなっています。

おじいさんは持っている服の中で一番いい服を着ておめかしし、すっかりりっぱなかつこうをしました。

そしてじっとさゆりのマッチ箱を見つめます。

おじいさんは思いました。

(さゆり。今まで本当にありがとう)

おじいさんは数回深呼吸して、たった一本きりのマッチを擦りました。

特別な日

マッチの明かりの中に、さゆりがあらわれました。

絵のとおり地味なかつこうをしています。

それでもうかなかった顔は、おじいさんを見るなりいつものようににっこりしました。

声の調子も明るく、

「あらあ、旦那さん。今日もお元気？」

と聞いてきました。

「おかげさまで元気だよ。ねえ、さゆり。今日のマッチが最後の一本なんだ」

「あら、まあ。じゃあ、今日はおとっときの一日ね」

「そうとも。いっとう、おとっときの日だよ」

「なんて素敵なお花に花びんでしょう。旦那さんのかつこうもとてもおしゃれで素敵だわ」

「ありがとうございます。素敵な一日にふさわしいようにね」

ふたりはほほえみあいながら陽気に言葉をかわしました。

さゆりが「うふふ」といつものように袖の下で笑い、「わたしだけこんなかつこうでごめんなさい」とつづけました。

「もしかして、さゆりは芸者をやめたのかい」

「実はそうなの」

さゆりは着物の袖をひらり、くると腕に回し、おどるようなしぐさをして言ったのです。

「わたし、お嫁さんになるの。旦那さまができたのよ。とっても運がよいわ。だから芸者のお仕事も、もうおわりにしたの」

おじいさんはいっかい目をふせました。

そして小さく息をつくと目をあげ、

「そうかい。それはよかった。おめでとう」

と言いました。

「結婚はとてもいいものだよ。本当におめでとう」

「ありがとうございます旦那さん。...実はね、明日がお式なの。このばらのようにまっ白な花嫁衣装を着るのよ」

「それは素敵だ。きっとさゆりならとてもきれいなんだろうね」

「そうだと嬉しいわ。.....ねえ、旦那さん。わたし、ほんとは一生きれいでいたい。だって、きれいなことがわたしの価値なんですもの」

「もしかして、それでさっきはうかない顔をしていたのかい？」

「そうね、わたしの仕事のお相手はほとんど奥さまがおありの方だったの。奥さまがいらっしゃるのに、若くてきれいな娘に会いたがるのよ」

「そうか...きみのご主人もそうなるんじゃないかって、心配なんだね」

「.....そうね。きっと、そう...」

さゆりはまた少しかない顔になりました。さゆりの不安はもっともです。

おじいさんは自分の奥さんの話をしました。

「前にも話したかな。不思議なものでね、しあわせな結婚をすると妻が年をとっても、夫には年をとったようにかんじないんだよ。若くて一番きれいだったときの姿がかさなって見えるようなんだ」

奥さんの姿を思い出しながら、おじいさんはきっとさゆりなら、と思いました。

「きっとさゆりなら、ご主人にそう思われるいい奥さんになれるよ」

さゆりは少しだまって思いをはせ、「きっと、そうなるといいわね」としずかに言いました。

芸者という仕事だったさゆりには、それはあまり期待できないことのように思いました。

さゆりの長年の経験をひるがえす言葉は見つからず、おじいさんは話題を変えました。

「どうだね、芸者の仕事は楽しかったかい？」

「そうね、.....楽しかったことばかりじゃなかったわね」

さゆりは初めて本当のことを言いました。いつも楽しいことばかりのように言っていたのです。

でも、さゆりはそれ以上はよけいなことは言わず、

「だけど、みんな楽しかったことにするわ」と言いました。

そしてさゆりはなにを思ったのでしょうか。こんなことを聞きました。

「ねえ、旦那さん。あなたのお名前をおしえて」

おじいさんの胸は高鳴りました。そういえば、自分の名前をおしえたことがありません。

ひとつ息を飲むと、おじいさんはこれ以上ないくらいにいねいに自分の名前をつむぎだしました。

「ウィリアムだよ。友だちはちぢめてウィルって呼ぶんだ」

「本当のお名前なの？」

「本当の名前だよ」

「.....ウィリアムさん。わたし、さゆりよ」

そうあらためて言うさゆりは、笑っていませんでした。明かりの中にまじめな黒い瞳がゆれます。でもその目はすぐ弧を描いて「うふふ」とさゆりはいつものように笑い、袖で口もとをかくしたうらでくすくす笑いつづけました。

「でもそれは芸者のときの名前なのよ。わたしにも本当の名前があるの。聞きたい？ 旦那さん」

おじいさんはしばらく考え、さゆりのどこかさびしげな笑顔を見て「いや、いい」と言いました。

「本当の名前でも、うその名前でも、さゆりはさゆりだよ。ほかのだれでもない」

そのおじいさんの言葉を聞いて、さゆりの笑顔は消え、愛らしい口もとがゆがんだかと思うと、袖で顔をかくしてしまいました。

そのまま着物の胸もとからハンカチのような布をとり出すと、おじいさんに背を向けます。どうやら布で目もとをぬぐっているようです。

もう一度おじいさんのほうを向いたとき、さゆりは目もとが少し赤くなってましたが、なんでもないかのように笑って、布を胸もとにしまいました。

「そう言ってくださるのね。うれしいわ、旦那さん」

これで最後になるせいか、今日のさゆりはいつもより正直なようです。

「わたしね、お客さんにうそばかり言っていたの。名前もうそ。言うこともうそ」

「そういうお仕事だったんだろう。さゆりがわるいわけじゃないよ」

「うふふ、そうよ。でもうそばかり言ってたから、自分でもなにがほんとかわからなくなってしまったわ。ねえ、本当のわたしなんているのかしら」

「まちがいなく、いるさ」

おじいさんは、しずかに強く、そしてやさしく言いました。

「毎日わたしをはげましてくれたさゆりも、上手に踊れるさゆりも、まちがいなく本当のさゆりだ」
さゆりはふと目をふせ、つぎにまぶたをあけたときは瞳がうるんでました。

オレンジ色の西日が二人の間にさしこみます。もう夕暮れになったのです。

「ありがとう、旦那さん...」

そうさゆりがこたえると、ほんの少しのあいだふたりはだまりこみました。

さゆりもいつものようにゆかいな話で間をつないだりせず、ただほほえんでいます。

西日のオレンジ色はレースのカーテンの影をうっすらうつしてゆれ、さゆりをいろどりしました。

テーブルにおいた白いばらの花もオレンジ色に染まっています。

さゆりはそっとテーブルによって、花びんからばらを一輪手にとりました。そして扇のように口もとを花でかくします。

「旦那さん、最後に踊っていいかしら？ 衣装も扇もないけれど」

「もちろん」

「うれしいわ。わたしがおぼえた唄と踊りをぜんぶ舞ってお見せするわ。このばらが扇のかわりよ」

そう言ってばらをひとふりすると、さゆりの踊りが始まりました。

唄いながら踊ります。さゆりの踊りは何曲も、長く、長くつづきました。

オレンジ色の西日はやがてばら色になり、むらさきになり、さゆりの踊りとばらを染め変えていきました。

舞うばらも、舞うさゆりも、夕暮れのいろどりの中でとてもとてもきれいです。

踊りに見入っているうち、おじいさんはばらのようなさゆりがきれいなのか、さゆりのようにばらがきれいなのか、わからなくなりました。

やがて日は暮れました。

最後のとき

さゆりがひらひら踊らせている白いばらは、今はロウソクのうす明かりを映した灰味がかかったクリーム色に見えます。

ロウソクの明かりはちらちらし、暗やみにあたたかな色のベールをうっすらとかけていました。

そのぼんやりしたうす明かりの中ではさゆりの姿はかろうじて見え、まるでまぼろしのようにはかなげでした。でも、たしかにそこにいて、唄い、舞っています。

さゆりの唄はいつしか悲しげになり、舞いはいよいよ繊細で、おじいさんの胸をうちました。

おじいさんは涙を流し、さゆりが最後のおじぎをしたとき、小さく長く拍手をしました。

「泣いてくださったのね。最後の踊りはとても悲しい男女の別れの唄と舞いだったの。しめっばいから、お座敷ではよっぽど踊りの好きなお客さんがぜひにとおっしゃらなければ踊らないのよ」

さゆりは宙をながめて、少しぼんやりしながらつづけました。

「ねえ、旦那さん。……今踊ってたわたしは、きっと本当のわたしだと思うの」

「そうだね。そのとおりだ」

「踊りがわたしで、わたしが踊りで…」

「そうとも。無心で踊っていたよ」

「旦那さん。いままでありがとうございました」

さゆりはもう一度深くおじぎをしました。

「ねえ、このばらをいただいてもよろしくて？」

さゆりは手に持っていたばらをひらりとさせました。

「もちろん。さゆりのためのばらだよ」

「うれしいわ。これさし木にして育てるの。このばらを旦那さんだと思って大事にするわ」

さゆりのその言葉が、おじいさんがいままで言えなかったひとことを押しだしました。

「さゆり……わたしはね、さゆりが大好きなんだよ」

さゆりはうす明かりの中で、ほほえんでいるようです。

「知っているわ。わたしも旦那さんが、いっとうお気に入りよ」

「さゆり……」

しばらく言葉もなく、ふたりは見つめあっていましたが、おじいさんがなにか言おうとしたとき、ロウソクがいはいよ燃えつきる瞬間がやってきました。

最後の火はいっそう大きくなって、部屋中を明るくします。

「ああ、いはいよ最後だね」

「ええ。お元気でね、旦那さん。楽しかったわ」

急に暗くなって火が消えるとき、さゆりはいつものように袖で口もとをかくして「うふふ」と笑い、「じゃあね」と言って消えました。

まるで、また明日も会えるかのように。

まっ暗な中で、目がなれてくると、おじいさんは家具やばらのりんかくをうすぼんやり見ることができました。

ただ、さゆりはいません。

「さゆり...元気で」

おじいさんもさよならは言いませんでした。

ふたつのばら

それから一年たちました。おじいさんはどうしたでしょう。

いままでと変わらないくらしをしていました。ていねいに庭仕事をして、朝ごはんを食べて、お昼ごはんを食べて、晩ごはんを食べています。そのあいまにときどき本を読んだりしました。

あいかわらず古いマッチもあつめています。

ただ、おじいさんはマッチ箱といっしょに素敵なロウソクもあつめるようになりました。

マッチを擦るとまたあの不思議がおこり、人や動物があらわれました。おじいさんはマッチの火をロウソクにうつしてお話をするようになりました。

ロウソクに火をうつすことを知る前よりは、ずっと長くお話をするようになりましたが、それでもさゆりのように長く、いろいろとしたしくお話することはなくなりました。だれもさゆりのかわりにはなれません。もうさゆりとは会えないのです。

それでもおじいさんはさびしくありませんでした。なぜなら、あんまりたくさんさゆりとおしゃべりをしたので、なにを言ったらさゆりがなんとこたえるのか、もうすっかりわかってしまっているからです。さゆりの声もしぐさもすべて、まるで見えるかのようにおぼえてしまったのでした。

ある朝、おじいさんはいつものようにおめかしして、庭先のばらに水をあげに行きました。

ばらのスザンナはすっかりもとどおりになり、たくさんの花をつけています。

「おはようスザンナ。今日も元気だね。みごとな花だよ」

おじいさんはスザンナに話しかけ、水をやり、咲きおわった花を切ったりして、ていねいにせわをしました。

それからきれいに咲いている花を一本切って部屋に持ちかえり、小さな花びんに生けてテーブルにかざりました。

そしておじいさんは水さしを持って、日の当たる窓辺に行きました。

そこには一鉢のばらがおいてあります。昨日からとてもきれいな真っ白い花を咲かせていました。

「おはよう、さゆり。とってもきれいだ」

おじいさんはそのばらに話しかけ、水をやりました。

それはさゆりと別れたときのばらです。おじいさんがさし木をして育てました。

いい香りをかぎ、いくえにもかさなった優雅な花びらをながめていると、さゆりの声が聞こえるようです。

「ねえ、言ったとおりでしょう？ 根のつくお花はとても強いだよ。ていねいにかわいがってあげてね」

「もちろんだよ、さゆり」

聞こえたさゆりの声の空耳に、おじいさんはこたえました。

おわらないこと

さゆりのマッチ箱は、おじいさんの宝箱の中にちゃんとあります。

そのラベルの絵のさゆりは、すっかり奥さんらしくなって、赤ちゃんをだいてほほえんでいました。

おしまい

おじいさんと不思議なマッチ箱

<http://p.booklog.jp/book/54085>

著者 : Etsuko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yororeana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54085>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54085>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ